

伊能忠敬墓碑銘

東河伊能君墓銘并叙

江都 一齋佐藤坦為文

君諱忠敬字子齋伊能氏號東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北総香取郡佐原村人本姓神保氏南総武射郡小堤村神保貞恒之第三子出冒伊能氏伊能氏世為閩右族其先出於大和高市郡西田郷大同中有諱景能者知北総香取郡大須賀莊居伊能村因以氏焉子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景久者始徙佐原天正中為居民開肆慶貿易君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱景慶考諱長由無子其配神保氏君之從祖姑也因丐君為嗣長由不幸蚤歿產頗荒君既來嗣慨然以幹蠱為志昕夕黽勉務儉素禁奢靡家衆百口以躬率先之天明三年關東大饑君為發私儲賑貸鄉里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田日州君並優賞之君好星曆至寬政六年委家事於子景敬躬獨來江都耑從事曆学當時所伝曆法君疑其有所不合徧就曆家質之猶未枿然既而 官會有改曆之舉召高橋東岡者新自浪速來君執贄往見始聞西洋曆法理精數密宿疑乃解遂棄旧学之推步測量之精東岡之門独推君云寬政十二年閏四月 官命君測量北陸道及び蝦夷地方東南沿海以定地度明年正月 官賜君父子銀各十錠許佩刀称姓氏賞其於天明年内兩救窮民也享和元年三月又命測量伊豆相模二総常陸陸奥沿海六月又 命測量出羽三越佐渡能登駿河遠江三河尾張沿海至文化紀元集地方各圖成一 大図進呈其九月 官賞賜廩米擢為小普請組属天文方既而又命測量山陽山陰西海南海四道壹岐對馬二島官道及沿海十

二年又 命測量伊豆七島及び箱根湖既竣事測量江都府内十四年四月府内図進呈自蝦夷測量之初至閏十有八年五畿七道無地不涉遐陬僻壤尽測量而図之最後有 命集成宇内沿海輿地圖全図及度数譜行程記至文政元年齡七十有四年罹病其四月十三日劇殆不起至四年七月輿地全図等成進呈以其九月四日歿 官追賞其功賜廩米宅地於孫忠誨以旌之君為人真率不修辺幅精力絶人每測量 命下輒喜見顔色不日而歿乃躬歷險阻凌海濤奔走數百里風雨寒暑未嘗少沮喪何其氣之邁而事之勤也哉所著有国郡昼夜時刻考对数差表紀源術並用法割円八線表紀源法地球測遠術問答凡若干卷皆藏於家君先配長由之女継配桑原氏皆先歿得三男二女昆季並殤仲子景敬嗣亦先歿孫忠誨嗣君之葬在城北浅草源空寺東岡君之塋域從遺囑也忠誨以状來請余銘乃略叙之為銘曰源深以遠流長以疏善積之厚慶則有余叩天之闔極坤之輿瘴煙毒霧不能為癒祈寒暑雨不能為痛乃如之人能有幾與貞珉可泐跡則不渝

文政五年壬午嘉平月下澣 淡海閣研書 孝孫忠誨立

伊能忠敬墓碑銘 訓訳 (意識)

東河 伊能君 墓銘并叙 江都 一齋佐藤坦 為文

(佐藤 一齋(さとう いっさい、安永元年十月二十日(1772年11月14日) - 安政六年九月二十四日(1859年10月19日))は、美濃国岩村藩出身の著名な儒学者。諱は坦。通

称は捨藏。字を大道。号は一斎のほか、愛日楼、老吾軒。）

君、諱は忠敬、字は子齊、伊能氏、東河と称し、三郎右衛門と称え、晩くには勘解由と称す。北総香取郡佐原村の人なり。

本姓は神保氏、南総武射郡小堤村の神保貞恒の第三子にして出でて伊能氏を冒す。

伊能氏は世、閭の右族（村の名門のこと）たり。

その先は大和高市郡西田郷に出づ。

大同中、諱、景能なる者あり。北総香取郡大須賀荘を知め、

伊能村に居し、因つて以つて氏とす。

子孫蟬聯（連なり続く）、その地を占む。

永禄中に至り、諱、景久なる者あり。始めて佐原に徙る。

天正中、居民となり、肆塵（商店）を開き貿易す。

実に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、

祖は、景慶、考は諱、長由、子無くその配神保氏は君の

従祖姑なり。（誤神保氏 正平山氏 誤従祖姑 正再従姉）

因つて君に丐（乞）うて嗣（あとつぎ）となす。

長由、不幸にも蚤（早く）に没し、産、頗る荒れる。

君、既に来たり嗣ぐ（後を継ぐ）。慨然として幹蠱（父が失敗した事業を子が立て直す）を以て志と為し、昕夕黽勉（日夜怠らず精を出し）、儉素（儉約して質素）に務め奢靡（身

の程をわきまえないぜいたく）を禁ず。家衆百口、躬を以てこれに率先す。

天明三年、関東大いに飢える。君、為に私儲（私財）を發し郷里を賑貸す。

施し近傍の村落に及び全活する所多し。

六年、又、飢える。これを救うこと初めの如し。

地頭津田日州君（旗本・津田日向守）、並びにこれを優賞す。

君、星曆を好み、寛政六年に至り家事を子景敬に委ね、躬独り江都（江戸）に來たり、耑めて曆学に従事す。

当時、伝うるところの曆法、君、其の合わざる所有るを疑う。

徧く曆家に就きこれを質すも猶、未だ釈然とせず。

しこうして官、たまたま改曆の挙有り。

高橋東岡（高橋至時）なる者を召し新たに浪速（大坂）より來る。

君、贊（進物）を執り往きて見え初めて西洋の曆法を聞く。

理精しく数密かにして、宿疑乃ち解け遂に旧学を棄てこれに学ぶ。

推歩（星の運行）測量の精、東岡の門、独り君を推すといふ。

寛政十二年閏四月、官、君に北陸道、及び蝦夷地方の東南

沿海を測量し、以つて地度を定ることを命ず。（誤北陸道
正奥州街道）

明年正月、官、君父子に銀各十錠を賜り、刀を佩び姓氏を
称うことを許す。

其の天明年内に窮民を兩救せしを賞してなり。

享和元年三月、又、伊豆、相模、二総、常陸、陸奥の沿海
を測量することを命ず。

六月、又、出羽、三越、佐渡、能登、駿河、遠江、三河、
尾張の沿海を測量することを命ず。（誤六月 正翌年六月）

文化元年に至り、地方各図を集めて一大図と成し進呈す。

其の九月、官、粟米（扶持米）を賞賜し擢んでて小普請組
と為し、天文方に属せしむ。

概にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と壱岐、対馬
の二島の官道、及び沿海を測量することを命ず。

十二年、又、伊豆七島、及び箱根湖を測量することを命ず。
既に事を竣え、江都府内を測量す。十四年四月、府内図成
り進呈す。

蝦夷測量の初めより此に至る十有八年を閱（時間が経過し）

し、五畿七道、地として渉らざるなく、遐陬僻壤（辺地ま
で含めた国土）くわくそくしやう 尽く測量してこれを図す。

最後に命ありて宇内（天地の間）沿海輿地全図、及び度数
譜、行程記を集成す。

文政元年に至り、齡七十有四、病に罹り其の四月十三日、
劇しくして殆ど起たず。

四年七月に至り、輿地全図等成り進呈し、其の九月四日を
以て吻す。

官、其の功を追賞し廩米宅地を孫忠誨に賜り以つてこれを
旌（功績や善行を誉め称える）せり。

君、人となり真率にして辺幅を修せず、精力絶人、測量の
命下る毎に、輒ち喜び顔色に見し、不日にして発す。

乃ち躬ら險阻を歴え海濤を凌ぎ奔走すること数百里、風雨
寒暑、未だ嘗て少しも沮喪（無くす）せず。

何ぞ其の気の邁（遠くを目指して絶間なく前進を続ける）
にして事の勤なるや。

著す所、国郡昼夜時刻考、対数表紀源術、並びに用法、割
円八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、皆、家
に蔵す。

君、先配長由の女（達）、継配桑原氏、皆先に歿（没）す。
三男二女を得、毘季並びに殤（若くして死ぬ）す。

仲子景敬嗣も亦先に歿す。孫忠誨嗣ぐ。
君の葬は城北浅草源空寺の東岡君の塋域（墓地）にあり。

遺囑（故人の生前からの頼み）に従うなり。忠誨、状を以
て来り、余に銘を請う。

乃ちこれを略叙し銘と為す。

曰く、源は深く以て遠く、流れは長く以て疏る。

善積の厚き、慶は則ち余有り。

天の闔(門)を叩き、坤の輿(大地・地球)を極む。

瘴烟毒霧(山川に漂う毒気を含んだもや)、癒を為す能

わず、祈寒暑雨、痛(病)を為す能わず。

乃ちかくの如き人、能く有らんか。

貞泯渤すべきも跡は則ち渝らず。

文政五年壬午嘉平月(十二月の異称)下澣(下旬)

淡海閣研書 孝孫忠誨立

〈付記〉

伊能忠敬墓碑銘叙は、佐藤一斎氏の筆になるという。この一斎氏、現在でいうところの知識人であるが、捻くった見方をすれば、自らの漢文の知識をひけらかして、ことさら難しく記述しているように感じる。もともと筆者に漢文の素養がないため、そう感じるのかもしれないが、真に能力のある人は、素人に分かるような説明ができる人だということを知ることがある。例えば、夏休みの期間にあるNHKのラジオ番組「子供科学電話相談」(名称は違うかも)を聞いてみるとそのことがよく分かる。小学生の鋭い質問に、その小学生に分かるように説明できる先生が、すなわち能力ある人だと思ふ。ラジオだから、なかなか説明

は難しいと思うが、中には、大人の筆者が聞いても分からない説明をする先生がいる。

つまり、忠敬の墓碑銘を叙した彼は、忠敬を讃えたことには違いないが、誰に向かつて、叙文を書いたのだろうか。当時は、今日以上に文解能力の差はあった。上は、この叙文の著者のように、漢文を極めた人、下は全くの文盲、辛うじて自分の名前を書ける人がいた時代。

江戸時代後半にもなると、世界的にもトップに位置する識字率を誇った日本だが、それは、生活に密着した文字の読解力であり、このような難解な漢文の読解ができる人は、まず極少数であったように思う。

そういう意味でも、一般人に忠敬の業績を讃え広めるためには、もっと平易な文章で著していただければと思う。

もちろん、忠敬の墓碑銘だけでなく、一般的に墓石に刻まれている叙文は、一様に難解だ。その難解さが、筆力だったのかもしれないが、今日の我々からすると、はっきり言ってお手上げ状態である。

もちろん、これらの古文書の読解力を持った専門家諸氏も多く居られる。だが、失礼ながら、その難解な古文書・漢文を現代文・用語に通訳して、筆者のような素人にも分かるように、解説して下さる例は少ない。

この難解さが災いしたわけではないだろうが、忠敬の偉業も低く見られてきたことも、あったのではないか。などと穿った見方をするのは、筆者のひねくれだろうか。

伊能忠敬の天草測量に、付廻り役として、ほぼ従事した上田宜珍。彼の墓碑銘は、現地を数度訪れ、一字一句確かめたこともあり、筆者にとつて馴染みがあったので、この書の作成初めから取り上げていたが、伊能忠敬の墓碑銘は、蚊帳の外に置いていた。それは、大谷亮吉の『伊能忠敬』にも掲載されているので、墓碑銘があることは知っていたことは事実だ。

しかし、実際に現地で確かめたことはなかったこと。さらに、なんとなく難解であるということ。などから、あえて避けていた。

そんな折、この書を出版する前に、著作権の問題と同時に、助言をいただきたくて、底本を含め、多くの資料を戴いている（勿論勝手に）、「伊能忠敬 e 史料館」の戸村茂昭様に、一応の原稿本を送付した。

そこで、戸村様から、助言をいただいた一つが、この「伊能忠敬墓碑銘」である。

それには、伊能忠敬の墓碑銘の拓本があった。折角の御行為なので、この書に取り上げることにした。そこで、拓本をそのまま掲載すると、リアリティがあるが、いつぞ自分らキーボードをたたいてみようと思った。そして、思ったことは、一つに頭書に述べたように、難解であるということ。その難解の一は、使われている漢字が旧字体であるということ。単語が難解であること。そのため、何と読むのか、何という意味なのか、一字一句、辞書を引きながら、辞書になければネットで調べた。結果、こんな難しい漢字

迄 PC に搭載されている事に感心した事もあった反面、調べても、意味不明の単語も多くあった。

先に述べた伊能忠敬 e 史料館から頂いたものでも、説明がないものも多かった。それはすなわち、現在の専門家でも、理解できないことがあるという事と解したい。

そうであれば、素人の筆者に理解できるわけがない。また読者諸士も、この忠敬の碑銘や、他所に数多く載せている古文書類は、飛ばして読んでいただいても構わない。そして再度読み返していただければ幸いである。ちよこつと読んでみたいと思っただけならば、その時は、何度か読み返していくうちに、完全には分からなくても、大体のことは分かるようになると思う。大意をくみ取るだけでも意味があると思う。

この碑銘解読文に関しては、伊能忠敬 e 史料館から頂いた解読文資料に、少しでも読みやすくなればと思い、少し手を加えた。それは、ルビを付け加えたこと、単語などの意味を追加したことである。ただし、辞書にも載っていないのは、そのままにしている。

また、当初の漢文の碑銘は、大谷亮吉著『伊能忠敬』による。

伊能忠敬及び高橋至時の墓

東京浅草 源空寺

伊能忠敬の墓は昭和になつてから発掘され、中央で、

高橋至時の墓の右にある小さな墓石の下に忠敬先生の遺骸が見つかりました。右側の大きな墓碑はその小さな墓に対する「墓誌」なのであつて、碑を建立した孫の忠誨(ただのり)が祖父の尊敬する至時先生の墓より大きな墓碑を建てるつもりが無かつたことは残された『忠誨日記』の記述内容を見ても明らかです。(ブログ・東亜天文学会「前歴史課長の試みより」)

伊能忠敬の墓は、実は二基あつた。現在は、真の墓は関東大震災後、区画整理とかで掘り起こされて、その真の墓はない。下の写真は、改葬前の墓の様子である。孫の忠誨は、師より大きな墓を建てることに、難を示したという。忠敬が死去したのは文政元年四月であり、現在遺されている墓碑建立は文政五年である。(伊能忠敬研究報 第27号)

上写真 伊能忠敬墓碑拓本 表面

伊能忠敬 e 史料館提供

下写真 左 高橋至時墓

中 伊能忠敬墓

右 伊能忠敬墓碑銘塔(右)

(『伊能忠敬』大谷亮吉著より)

